

# 気象キャスターが解説! 天気のみかた

連載第16回  
平成の災害と  
気象情報の進歩

気象キャスターネットワーク



平成27年9月関東・東北豪雨の被災地  
茨城県常総市は豪雨から1ヶ月経ってもまだ爪あとが残っていました。

4月30日で平成が終わります。  
平成は災害が多いといわれていますが、「気象庁が名称を定めた気象現象」で平成を振り返ってみます。  
気象庁では、顕著な災害を起こした自然現象について名称を定めることとしています。これによって、防災関係機関等による応急・復旧活動の円滑化を図るとともに、災害の経験や貴重な教訓を後世に伝承することを期待するものです。

## 気象庁のHPによると、これまで名称が定められた気象現象は29

一つ目は昭和29年の洞爺丸台風(台風15号)、次いで昭和33年の狩野川台風(22号)、昭和34年は宮古島台風

気象庁が名称を定めた気象現象一覧

名称	期間・現象等
1 洞爺丸台風	昭和29年9月(台風第15号)
2 狩野川台風	昭和33年9月(台風第22号)
3 宮古島台風	昭和34年9月(台風第14号)
4 伊勢湾台風	昭和34年9月(台風第15号)
5 昭和36年梅雨前線豪雨	昭和36年6月24日～7月10日
6 第2室戸台風	昭和36年9月(台風第18号)
7 昭和38年1月豪雪	北陸地方を中心とする大雪
8 昭和39年7月山陰北陸豪雨	昭和39年7月18日～19日
9 第2宮古島台風	昭和41年9月(台風第18号)
10 昭和42年7月豪雨	昭和42年7月7日～10日
11 第3宮古島台風	昭和43年9月(台風第16号)
12 昭和45年1月低気圧	昭和45年1月30日～2月2日
13 昭和47年7月豪雨	昭和47年7月3日～13日
14 沖永良部台風	昭和52年9月(台風第9号)
15 昭和57年7月豪雨	昭和57年7月23日～25日
16 昭和58年7月豪雨	昭和58年7月20日～23日
17 平成5年8月豪雨	平成5年7月31日～8月7日
18 平成16年7月新潟・福島豪雨	平成16年7月12日～13日
19 平成16年7月福井豪雨	平成16年7月17日～18日
20 平成18年豪雪	平成18年の冬に発生した大雪
21 平成18年7月豪雨	平成18年7月15日～24日
22 平成20年8月末豪雨	平成20年8月26日～31日
23 平成21年7月中国・九州北部豪雨	平成21年7月19日～26日
24 平成23年7月新潟・福島豪雨	平成23年7月27日～30日
25 平成24年7月九州北部豪雨	平成24年7月11日～14日
26 平成26年8月豪雨	平成26年7月30日～8月26日
27 平成27年9月関東・東北豪雨	平成27年9月9日～11日
28 平成29年7月九州北部豪雨	平成29年7月5日～6日
29 平成30年7月豪雨	平成30年6月28日～7月8日

### 昭和～平成の気象災害(気象庁HPより)

気象庁が名称を定めた気象災害は、これまでに29。

風(14号)、伊勢湾台風(15号)と続けて台風による甚大な被害が発生しました。

昭和の最後は昭和58年7月豪雨。7月20～21日に、日本海に低気圧が進んだことで梅雨前線の活動が活発になり、23日にかけて本州の日本海側を中心に大雨。特に島根県の浜田市では、記録的な大雨となり、山崩れや土石流、洪水などで100名を超える死者・行方不明者が出ました。昭和では洞爺丸台風からの29年間で16の現象に名称がつけられました。

平成の最初は「8.6水害」「鹿児島水害」と呼ばれた「平成5年8月豪雨」。7月31日から8月にかけて前線や台風によって全国で大雨災害が発生し、特に8月6日は鹿児島県を中心に豪雨となりました。平成5年は九州南部で唯一梅雨明けのない年です。

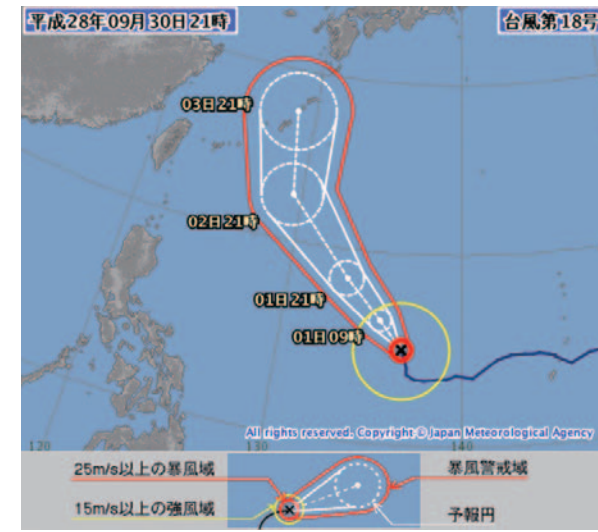
その後、平成16年7月には梅雨前線の活動が非常に活発になり「新潟・福島豪雨」「福井豪雨」が相次ぎました。「新潟・福島豪雨」は平成23年7月にも発生、九州北部も、「平成21年7月中国・九州北部豪雨」「平成24年九州北部豪雨」「平成29年九州北部豪雨」と、名称がつけられた豪雨災害が3度発生しています。昨年は「西日本豪雨」と呼ばれることの多い「平成30年7月豪雨」での被害が広域に及びました。

気象災害だけでなく、平成5年1月の「釧路沖地震」、7月の「北海道南西沖地震」から昨年9月の「北海道胆振東部地震」まで15の地震に名称が定められ、火山は平成3年の雲仙岳と平成12年の有珠山に名称が定められました。

地面の中の地震や火山の発生の予測はまだ難しいですが、空からの気象現象は予測でき、その精度も上がってきています。予想技術の進歩だけでなく、情報を得るツールもどんどん増えているため、近年は気象災害から生命や財産を守れる確率は高くなっています。

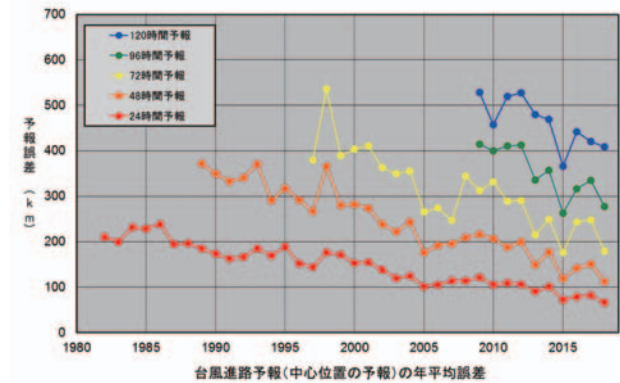
平成23年の東日本大震災の津波や台風12号による紀伊半島の大規模な災害によって、平成25年から特別警報が運用されるようになったり、台風の予報円は従来よりも小さくなる改善が行われています。

広範囲に及ぶ災害だけでなく、局地的な集中豪雨や竜巻などの現象は、自ら情報をとることが大切です。これにつ



### 台風の進路予想(気象庁HPより)

3日先までの進路予想図。従来よりも予報円が小さくなり、警戒を呼びかける地域が絞り込めるようになりました。

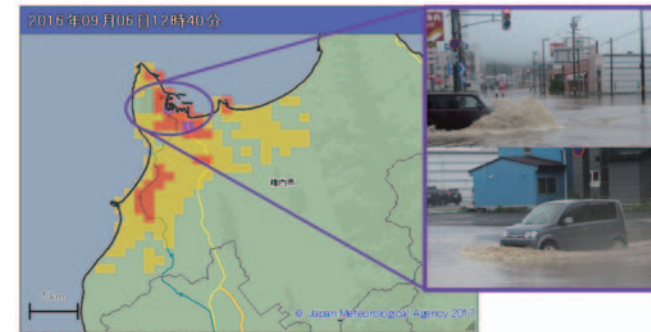


### 台風進路予報の年平均誤差の推移(気象庁HPより)

2009年から開始された「5日先までの予報」も含め、導入当初よりも誤差が小さくなっています。予報の精度が高くなっている表れです。

いても、雨雲レーダーはより鮮明な高解像度降水ナウキャストが見られるようになり、竜巻注意情報も細分化され、従来より早く情報が発表されるようになりました。特に、「危険度分布」は大雨によって①土砂災害②浸水③洪水の危険度が視覚的に判断できる画期的な情報です。同じ雨でも、川の近いか崖の近いかによって、起こる災害は異なります。大きな河川が増水する前に、近所の細い河川があふれることもあります。このような危険度が色分けされて時間経過による変化も確認することができます。

### 大雨警報(浸水害)の危険度分布(平成28年9月6日の稚内市の状況)



### 浸水の危険度分布(気象庁HPより)

2016年9月6日、前線や低気圧の影響で北海道の稚内では統計史上1位の記録的な大雨となりました。浸水の危険度は紫色が示され、浸水害が発生しました。



### 洪水の危険度分布(気象庁HPより)

平成29年7月九州北部豪雨での福岡県倉敷市の事例。時間が経つにつれ、上流から下流へと危険度が増していく様子がわかります。

私はラジオの気象情報を担当しているので、すべての状況を言葉だけで解説しなければなりません。災害の危険が高まっているときは、パソコンやスマホで情報を得られる場合には率先して確認してもらい、離れた家族や知人にも知らせて欲しい旨も伝えています。

雨による災害だけでなく、暑さも気象災害の一つといわれています。去年は熊谷で最高気温41.1度を観測し、日本の最高気温の記録が塗り替えられました。また、東海地方を中心に何度も40度台に達し、今後は「猛暑日」を上回る表現が必要になるかもしれません。

また大雨になっている地域もあれば、まったく雨が降らず取水制限がとられるなど極端な状況になる夏もあります。気象庁では長期的な予報や2週間先の高温・低温などに注意を呼びかける情報を出しているの、早めに対策をとることもできます。

新しい元号になると、まもなく「立夏」、沖縄の梅雨入りも近づきます。

新たな初夏から夏…厳しい暑さや激しい雨から身を守り、いい思い出が増えていくことを願います。



### 熊谷の老舗デパートの前の巨大温度計

毎年、暑さを伝えるニュース映像でもおなじみですが、埼玉県熊谷市は「暑さ日本一」から「暑さ対策日本一」の街と進化して熱中症対策などを行っています。

### 夏の全国高校野球

100回の記念大会から「給水タイム」がとられるようになりました。暑さ対策として、開会式では観客へも給水が呼びかけられました。

いとう

## 伊藤 みゆき

## Profile

気象予報士  
NHKラジオ気象キャスター  
1997年に資格取得後、民放のテレビやラジオ局での解説を経て、2006年からNHKラジオ第一に出演。言葉だけで全国の天気を伝えるのは難しい反面、リスナーからの反応が多く届くのが励みになっている